

第9回全国「高校文芸誌(及び文芸創作)」コンクールについて

日常を揺さぶる快、怪、戒

選考委員長 村中李衣

今年で全国「高校文芸誌(及び文芸創作)」コンクールは、9回目を迎えました。

全国から寄せられた55校55誌、作品総数4700との熱い向かい合いを終え、審査員一同、これまでの審査とはちょっと異なる傾向があったと感じています。

それは、良くも悪くも、日常にかなり密着した素材を選んでいるということです。文芸誌についていえば、自分達の高校がある地域を舞台にした作品作りや作家研究が多く見られ、高校生の間にもローカルティが意識されてきていることを実感させられました。ただし、それが、地域の見直し、掘り起こしに留まらず、新しい世界観の構築へ繋がる展望を持っているかどうか、評価を分けることになったようです。高校文芸誌部門最優秀賞の『琢磨』第86号は、活字文化への危機感を若い世代なりに部員が共有しながら、中身のある誌面を足で稼いで作り上げたことに、高い評価が集まりました。優秀奨励賞を獲得した『いさらゐ』第51号、『文学研究』第5号、『翔る』第2号、いずれも、地域色豊かな優れた文芸誌でしたが、「地域」の捉え方にある種のパターンが垣間見えるという意見も出ました。それにしても、部員2名で、甘えのない重厚な研究誌を完成させた『文学研究』には、驚嘆させられました。また、学生の目線で梅光学院大学文芸賞に選ばれた『煌』第6号も、楽しみながら作り上げていった過程がみえるようなバラエティに富んだ文芸誌でした。

九州・山口奨励賞には、『なみき』第115号が選ばれました。伝統ある文芸誌です。

さて、個人作品部門についてですが、まず、小説部門に最優秀作品賞の該当作がなかったことが、非常に残念でした。扱う素材が、家族や友人、自分の進路やクラブ活動と、身近なものに絞られ、そのまとめ方も手堅いものが多かったのですが、良く書けているね、という印象を超えるものではありませんでした。日常の中の狂気や破れ目を鋭く抉り出していくような作品を期待したいものです。一方、詩の部門では、目線のぶれがない秀作が多くありました。最優秀作品に選ばれた小原翠さんの「鍵合わせ」は、とりわけ「私」の主張でなく、「私」の懐疑を軸として、徹頭徹尾ことばで考え抜こうとする覚悟が見事な表現へと実を結んでいました。また、今回は千葉由穂さんの俳句「青の断片」が、最優秀賞に選ばれました。俳句は、個人作品としてまとまって読むことのできる文芸誌が少ないのですが、千葉さんの作品は『紫苑』の中でも、ことばが鮮烈な光を放ち、魅力的な役目を果たしていました。短歌では、佐藤幸さんの「にじのふもと」と、田中さんの「月・旬」他が、みずみずしい作品として優秀賞に選ばれました。

また、入賞は逃したものの『いさらゐ』の英語俳句は、高校生の試みとして評価できるし、『黎』のエッセイと短歌を組み合わせた歌物語の試みも、個人作品としてはまともでないけれど、毎年地道に継続されており、読むのが楽しみであるという声があがったことを付け加えておきます。

いずれにせよ、日常ほどいろいろなものが蠢いている場所はそうあるものではありません。日常にうまく丸め込まれないように、果敢に挑戦を続けてください。

「高校文芸誌」部門

最優秀奨励賞

文芸誌名	高校名	県名
琢磨 第86号	秋田県立秋田高等学校	秋田

優秀奨励賞

いさらゐ 第51号	筑紫女学園高等学校	福岡
文学研究 第5号	北海学園札幌高等学校	北海道
翔る 第2号	福岡県立門司大翔館高等学校	福岡

佳作

花北文学 第52号	岩手県立花巻北高等学校	岩手
海碧 第7輯	市立函館高等学校	北海道
志高文芸 第43号	岩手県立盛岡第四高等学校	岩手
黎 vol.9	岩手県立盛岡第三高等学校	岩手
イーストマガジン vol.6	東野高等学校	埼玉

梅光学院大学文芸部賞

煌 第6号	岩手県立水沢高等学校	岩手
-------	------------	----

九州・山口地域奨励賞

なみき 第115号	宮崎県立高鍋高等学校	宮崎
-----------	------------	----

個人作品部門

賞	分類	ペンネーム	作品名	県名	高校名	文芸誌名
最優秀作品 下関市長賞	詩	小原翠	鍵合わせ	福岡	福岡県立門司大翔館高等学校	翔る 第2号
最優秀作品 梅光学院長賞	俳句	千葉由穂	青の断片	宮城	仙台白百合学園高等学校	紫苑 第43号
最優秀作品 佐藤泰正賞	該当作品なし					
優秀作品 同窓会賞	小説	照井あゆみ	絆の証	岩手	岩手県立花巻北高等学校	花北文学 第52号
優秀作品 同窓会賞	小説	松ヶ迫美貴	カバン	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第51号
優秀作品 同窓会賞	小説	渡辺雄二	距離	神奈川	桐光学園高等学校	桐光学園文芸部誌 第壱拾参号
優秀作品 同窓会賞	詩	瀬川智子	わたくし	福島	福島県立葵高等学校	現想 第7号
優秀作品 同窓会賞	詩	園元理佳子	羨望	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第51号
優秀作品 同窓会賞	詩	市川朱菜	春	宮城	仙台白百合学園高等学校	紫苑 第43号
優秀作品 同窓会賞	詩	松ヶ迫美貴	流れてく	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第51号
優秀作品 同窓会賞	詩	豆塚エリ	あの雨の日の君の叫びはコトバ にできなかった	大分	大分県立大分上野丘高等学校	青窓 第76号
優秀作品 同窓会賞	短歌	佐藤幸	虹のふもと	宮城	仙台白百合学園高等学校	紫苑 第43号
優秀作品 同窓会賞	短歌	田中	月・句 他	岩手	岩手県立盛岡第三高等学校	黎 vol.9
佳作	小説	萩野月	リセット	宮城	宮城県名取高等学校	いろは遊び 第4号
佳作	小説	北村明夏	サーカス	岩手	岩手県立水沢高等学校	煌 第6号
佳作	小説	津島詩織	オリエンズまで	山口	山口県桜ヶ丘高等学校	文芸 蜜蜂 第64号
佳作	小説	esp106	漂えど沈まず	山口	山口県立防府高等学校	レセダ 第55号
佳作	詩	清野絵理	読書家の戯言	秋田	秋田県立秋田高等学校	琢磨 第86号
佳作	詩	東風谷	かみさま、はいつてます。	福岡	福岡県立八女高等学校	ゆうかり 第104号
佳作	詩	空翠	普通・フツー・不通	福岡	福岡大学付属若葉高等学校	月華
佳作	詩	末永 瞳	同志	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第51号
佳作	詩	しおあじ	むらかみさん	宮崎	宮崎県立高鍋高等学校	なみき 第115号
佳作	俳句	豆塚エリ	女子高生二人 他	大分	大分県立大分上野丘高等学校	青窓 第76号
佳作	短歌	金森春香	冬	秋田	秋田県立秋田高等学校	琢磨 第86号
佳作	ルポルタージュ		今「本」に何が起きているのか？ —秋田で「本」に関わる人達を取材し ての考察—	秋田	秋田県立秋田高等学校	琢磨 第86号
佳作	評論		特集— 川端康成 ～「山の音」の魅力を探る～	北海道	北海学園札幌高等学校	文学研究 第5号
佳作	企画		歌合	岩手	岩手県立花巻北高等学校	花北文学 第52号
佳作	以下、該当作品なし					

選考委員の講評と感想

村田喜代子(本学教授 作家)

来年に期待

昨年、一昨年と高い水準の小説を読むことができたが、今年は残念なことに最優秀賞にふさわしい作品を見つけることはできなかった。しかし何年もコンクールを続けると、こういうことはあるのである。芥川賞をはじめとする大小の賞でも、当選作なしが数年続くこともある。沈静して自身の書いたものを見直す機会ととらえるのも大切なことである。

そこで優秀賞に残った作品について感想をのべてみよう。

照井あゆみさんの「絆の証」は、文章も妙なクセがなく、いちばんまとまっていた。高校生の年頃で得られる人生の情報を、しっかりと手に掴み取っていた。祖母の死に病院へ急ぐ後半に力があつた。ただ古風すぎるタイトルと共にテーマの捉え方に新鮮味がほしかった。中身がまとまっているということは難でもあるのだ。

松ヶ迫美貴さんの「カバン」は、持ち主の生き方や生活を表しているカバンというものに話を集約させた。無駄のない絞り込みのいい作品だった。ただ導入部のシビアな視点が、ラストではいつのまにか少女っぽい甘い視点となって結ばれている。

渡辺雄二さんの「距離」は、文芸部に所属する少年の創作の日々を書き込んだ。カフカに心酔する主人公の日常と心象世界の交錯が鮮やかで、後半は一気に読ませる。しかし文章にクセがある。この若さで。人物の作りすぎも気になる。とくに昌弘である。また、どうでもよいところで過剰な文章を書き過ぎて、話が停滞する。そのわりにセリフのやりとりは普通すぎる。優秀作の中では最も小説意識を高く持った人であることは感じるが、直さねばならないものも多く抱えている。

次は、佳作として北村明夏さんの「サーカス」に移る。これは小児病棟をまわる専門の道化師が主人公である。閉ざされた白い病室の中のサーカス。病気の子供を相手にする道化師の若者の苦悩を描くが、その悩み方があまくシロウトのようである。職業としての厳しさが感じられない。こういうテーマでは愛や善意について深く考え直してほしい。

佳作もう一篇は萩野月さんの「リセット」。これは書きたいことがまっすぐな文体できちんと書かれていて、好感がもてる。しかしここから表現というハードルを越えねばならないのである。

小林慎也(本学教授 ジャーナリスト)

現実の暗い影

小説と定型の俳句短歌を中心に読んだ。小説では、「カバン」「絆の証」「サーカス」などに注目した。この世界の現実や、体験している日常を、それぞれが「死」や「病気」「離婚」など、負の側面から照射していたところに、引かれた。一方で、自由奔放な若さを爆発させる作品はすくなかった。若い人達の表現や感性の飛躍にブレーキをかけているのは、時代や文明の閉塞状況のせいかも知れないと思った。

表現とことば感覚を磨くには、伝統的な定型の短歌俳句が有効だ。今回も、歌会、句会を始め、吟行、歌合(わせ)など、さまざまな意欲的な企画が見られた。個人の創作でありながら、集団(座)の文芸でもあるのも面白い。ただ、一首一句で評価しにくいのが辛い。

個人の作品では、俳句最優秀賞の千葉由穂さんが光っていた。「青の断片」は三十二句。青い感性のしなやかさ。「ぶらんこと宇宙揺らしたる少女」「風花や約束せずともまた会える」

北川 透(本学特任教授 詩人 文芸評論家)

〈普通〉という圧力

ある詩の中に、《普通だなんて つまらない／誰だって普通なんかじゃない》という二行を見つけて納得した。いま、高校生や若い人たちは、とても大きな見えない力で「普通」を強いられている、と思う。その詩も、「フツー」って何だろう、と問いかけていた。この場合の「普通」は、「みんな同じ」とか、「一般的」というのに近いけど少し違う。それから外れたものを排除する「規格品」や、社会や学校が求める「標準」というのに近い。高校文芸誌の詩や小説も、うまく書けていたり、いなかたりするけど、みんなどこかで《誰だって普通なんかじゃない》、と叫んでいるような気がした。最優秀になった詩「鍵合わせ」も、どこの鍵穴に合うか分からない鍵を持っている嬉しさが書かれていた。鍵がある限り、それに合う鍵穴もどこかにあるだろう。そのどこかを探す旅は、詩や小説を書く行為に似ている。世界にたった一つの鍵穴を見つけるために、「規格品」や「標準型」からはみ出して欲しい。

宮崎勝弘(本学教授 ジャーナリスト)

ゲーテンベルグ革命を超えて

活版印刷術が生んだ無機的な活字の登場により、話者の肉声に支えられた〈語り〉の世界は退場を迫られ、〈本〉という、作者の肉声から離れた、読者が一人で享受できる装置が全盛となった。このゲーテンベルグ革命から 600 年、いま、IT革命により表現空間は大きく揺さぶられている。

「本は、今後、どうなるのだろうか」。今回、初めて「文芸誌」部門の審査を担当し、素朴な、しかし根本的な問いが若い世代から発せられ、ある種、新鮮な驚きと、この動きの大きさ・深さを思った。

『琢磨』のルポルタージュ「今、『本』に何が起きているのか？」は、文句なく素晴らしい。地元の書店経営者や出版社社長、図書館司書、推理小説家らをインタビューし、本を取り巻く環境を理解した上で、情報化社会が知の空洞化を進める恐れを警告している。文化とは何か、を考える部員 7 人、頼もしくも、すがすがしい。『いさらぬ』に創作に取り組むエネルギーを感じ、『文学研究』は部員 2 人と知り脱帽、『翔る』の特集は高校生らしい好奇心と発見があった。

今年の文芸誌で目に付いたのは、①書くことを楽しみつつ伸びあおうとする姿勢②地域への関心と地域からの協力、である。それは、「言葉のちから」を信じている結果であり、理由にほかならない。

鍋島幹夫(本学教授 詩人)

言葉で開く

生きていくことは開いていくことなのだ。詩作品を読み、この当たり前のことがふと頭をよぎった。「言葉を知り得なかったら／愛せなかった」という行のある詩「あの雨の日の君の叫びはコトバにできなかった」が意識のどこかにひっかかっていたのだろうか。

「コトバ」に囚われた世界にあって、「言葉」による愛しいものとの出会いを主題とするこの詩も結局、ことば、言葉、コトバと切り開いていった結果であろう。自分だけが開けられる部屋を仮構し、存在の不思議と生のわななきを描く「鍵合わせ」という詩も幾つもの「部屋」を経てきたから書ける作品である。

賞にあがった作品では、生きていく上で直面する不可解さを、裏切りを含め自己の内部までも腑分けして書く視力の確かさと言語力に感心させられた。視点を変え多重に見るのも、わざと焦点をぼかして見るのも、言葉は愛という認識が底にあるからだ。

島田裕子(本学教授 上代和歌研究 歌人)

いま一度作品を振ってみよう

今回もたくさんの短歌が送られてきたことはほんとうにうれしいことである。今年の特徴は生活実感に基づいたものが多く、素直なことばで感情を吐露したものが多かった。それは短歌・俳句では基本的で大事なことだが、ただ浅い。詠まれたものをさらにひねり振ってみてほしかった。定型短詩は、短くて音数の決まりがあるので五感と語感をより敏感にして作ることが必須となる。

受賞作品はその点をよく意識してそれぞれの詩空間を作っている。千葉由穂さんの俳句「青の断片」は五感と語感にじっくりと耳を傾けて詠んだものである。また、佐藤幸さんの「虹のふもと」の短歌も日常の些細な事から自分の詩の世界を広げていくところが魅力的だった。田中さんの、でんと肥えた「冬瓜」の短歌は、ゆたかに育った冬瓜の佇まいをユーモラスにとらえている。但し、古典文法で詠む場合は陳腐な感じになる場合もあるので気をつけよう。また、安易に「けり」「かも」を使わないこと。

『いさらい』で長年続いている俳句会は、年々質の高いものになっている。継続の大事さを示すものである。一人で10句くらい作ることも試みてほしい。

加藤邦彦(本学准教授 日本近・現代文学研究)

地域に眼を向けることの意義

今回、全体的な印象として心に残ったのは、自分たちの学んでいる地域に眼を向けようとする姿勢が多く、多くの文芸誌にみられた、ということです。高校という空間で過ごしていると、自分たちが社会とは切り離された存在であると考えがちです。しかし、高校もまたひとつの社会であり、その社会は外部の社会とつながっています。高校生諸君は文芸誌づくりのなかで地域に眼を向けることで、そのことが強く実感できたのではないのでしょうか。とてもいい傾向だと思います。ただ、地域に眼を向けることの意義については、絶えず自問自答してください。目的なく地域を取り上げている文芸誌もいくつかみられました。

最優秀奨励賞の『琢磨』は、全体的にレベルの高い雑誌ですが、なかでもルポルタージュ「今「本」に何が起きているのか？」が圧巻でした。取材力の高さもさることながら、外に出ていこうとする姿勢を何よりも高く評価しました。優秀奨励賞の『いさらゐ』は文芸誌のひとつの完成形。『文学研究』はたったふたりの部員でこれほどのクオリティの高い雑誌を制作したことに驚きました。

梅光学院大学文芸部 学生代表

『煌』第六号を推薦します

今年も全国「高校文芸誌(及び文芸創作)」コンクールの季節となりました。去年、表彰式にて高校生が作った文芸誌を初めて拝見し、感動しました。今回も、どんな高校生、どんな文芸誌に出会えるのか、胸を高鳴らせながら、55冊の文芸誌を読ませて頂きました。

全体的に、企画や特集の完成度が上がっているように感じました。また、小説や、詩、俳句が、単純に寄せ集められているのではなく、様々なジャンルが縦横に絡まりあって、文芸誌の特色が作り上げられていることに感心しました。読んでいて楽しかったです。

その55冊の中から、今回私達文芸部員が賞に推薦させて頂いたのは、岩手県立水沢高等学校の『煌』第6号です。非常に読みやすかったです。また、校歌の作詞者の解釈、人物の年表、短歌でのショートストーリーなど企画の立て方にハッとさせられるものがありました。企画力の豊かさは、文芸部そのものの豊かさでもあるのでは、と考えました。

来年も皆さんの楽しい文芸誌を待っています。